

研究課題名 (倫理委員会承認番号)	M2 閉塞に対する combined technique を用いた血栓回収術における、ステント先端と吸引カテーテルのなす角度と有効再開通の相関の解析 202503
当院の研究責任者(所属)	蛭子裕輔 (脳神経外科)
他の研究機関及び 各施設の研究責任者	該当なし
本研究の目的	近年、より遠位の病変に対する血栓回収術が行われるようになってきている。遠位であるほど血管蛇行が強くなることが多く、再開通が困難な場合がある。本研究では、M2 閉塞に対する combined technique を用いた血栓回収術において、吸引カテーテルより遠位（ステント展開部）の血管蛇行が再開通に関与しているかどうかを検討する。
調査データの該当期間	2019 年 1 月 1 日 ～ 2025 年 3 月 31 日
研究の方法 (対象となる方)	上記期間に当院で血栓回収術を施行した急性主幹動脈閉塞患者。 【除外基準】 本人、あるいは代諾者から承認の得られない患者 医師が不適切と判断した患者
研究の方法 (使用する情報)	(1) 研究方法 対象は、2019 年 1 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの間に当院で血栓回収術を施行した急性主幹動脈閉塞 216 例のうち、M2 閉塞に対して手技を行った 78 例とする。このうち、動脈硬化性閉塞、血管穿孔例、ADAPT で終えたもの、吸引カテーテルを不使用または内頸動脈までしか上がらなかった症例は除外する。対象症例の手術動画を見返し、ステント展開時のステント先端の接線方向(S)、吸引カテーテル先端の接線方向(A)、bifurcation 直前の M1 の接線方向(B)について、S と A (SA angle)、S と B (SB angle)のなす角度をそれぞれ測定する。M2 領域における TICI$\geq$2b と TICI<2b の 2 群間で、SA angle と SB angle、ステントの種類・径・有効長、吸引カテーテルの種類・位置 (M2 or M1)、背景因子、頭蓋内出血の有無を比較検討する。また、頭蓋内出血の有無の 2 群間で上記因子を比較検討する。 (2) 解析方法 (本院で ☐実施しない ☒実施する) 背景因子の各項目を、t検定、Mann-Whitney U検定、Fisher直接検定で比較検討する。 (3) 評価項目・方法 背景因子：年齢、性別、左右、NIHSS、DWI-ASPECTS、発症前mRS、tPAの有無、最初の閉塞血管 手技因子：ステントの種類・径・長さ、吸引カテーテルの種類・位置、pass回数、ステント先端と吸引カテーテル先端のなす角度、ステント先端どMCA bifurcationのなす角度、術後頭蓋内出血（くも膜下出血および症候性頭蓋内出血）
資料・情報の他機関への提供	該当なし
個人情報の取り扱い	データの解析および研究成果の発表・公表においては、個人を特定できる形としない。
本研究の資金源 (利益相反)	なし
お問い合わせ先	翠清会梶川病院 脳神経外科 蛭子裕輔
備考	

